

横浜アコーディオン愛好会の演奏を聴いてきました

青葉区民音楽祭 2022 年 10 月 30 日（日）都筑公会堂 11：30～12：15

天候に恵まれ行楽日和となった日曜日、毎年行われている『青葉区民音楽祭』に横浜アコーディオン愛好会は今年も出演しました。（入場無料）

この日は、第一部が青葉区民音楽祭で（10：30 開始）1 団体の演奏時間は 45 分、入れ替え時間 15 分の進行で 7 団体が出演（第一部終了は 17：15）。

第二部は、横浜市全体で取り組んでいる「横浜音楽祭 2022」を青葉区ではドイツの交響楽団でオーボエ奏者だった「及川寛繁さん」のオーボエリサイタルを企画しました。（入場整理券が必要）

横浜アコーディオン愛好会は 2 番目の時間枠で出場しました。

恒例となった「80 日間世界一周」で始まり、アメリカ「マイアミ・ビーチ・ルンバ」、フランス「ラ・メール」ここまで合奏。ドイツ「私を泣かせて下さい」（歌劇、リナルドより）は独奏（写真①）、と旅を続けます。

「スワローティル&トビンズファンシー」は重奏。（写真②）



「サウンド・オブ・ミュージック」は合奏（写真③は、前奏の前にじゃばらだけ動かし風を表現している様子）。

次の「ひとりぼっちの羊飼ひ」は三重奏（写真④）。再び合奏で「ラデツキー・マーチ」そして最後は日



本に戻り「ふるさと」で旅は終わります。「ふるさと」はコロナ禍でなければお客さんと一緒に歌いたかったとのことでしたが、アコーディオンの演奏で歌ったメンバーの重唱も素敵



でした（写真⑤）。

写真で見るように指揮無しで演奏する点も“横アコ”の特徴です。

.....
ちなみに、音楽祭のプログラムによると第一部では、◇「青葉台ジョイフルフレンズ・ハーモニカ」の演奏。◇マリンバアンサンブルグループ「マリンBA マリン」の演奏。以降は団体名を省略。
◇リコーダーの演奏。◇インドネシア竹製民族楽器のアンサンブル。◇オカリナの演奏。◇高等学校吹奏楽部の演奏でした。

.....

第二部 18：00～19：15

「及川寛繁 オーボエリサイタル演奏」メンデルスゾーン「歌の翼に op. 34-2」、滝廉太郎「荒城の月」他、全 6 曲演奏。

筆者はハーモニカの途中からホールに入りマリンバの演奏まで聴いて退席したので“横アコ”以外の演奏はプログラムからの転記です。

ハロウィーンの前日とあって利用した乗り換え駅では仮装した若者たちを見かけながら帰途に着きました。

（記：乙津）

「第14回 アコーディオンコンサート（千葉アコーディオンサークル）」

2022年10月16日（日）午後2時開演 千葉市美術館さや堂ホール

2022年10月16日（日）午後2時より千葉市美術館さや堂ホールで開催された千葉アコーディオンサークルのコンサートへ出かけました。初めての場所なので事前に下調べをした際に、美術館らしいユニークな建造物らしいと知りましたが、「さや堂ホール」という演奏会会場となった場所には円柱状の大きな柱が何本もあり天井にはシャンデリアが下がっていて独特な雰囲気でした。演奏開始前から、既に気持ちは何だかワクワクしていました。

（写真：さや堂ホールホームページより）



そして開始時間となり最初の曲はメンバー全員の合奏による『シルクロードのテーマ』。その最初の一音が耳に届いた瞬間に「ああ何と豊かな響きだろう」と気持ちが引き込まれていきました。予め「響きの良いホール」だとサークルメンバーの方から聞いていましたが、本当に驚く程でした。悠久の時の流れを感じるような心地よい演奏で幕を開けたコンサートでした。（写真①）引き続き、合奏で『秋の歌メドレー』。季節を感じる良い選曲でした。



その後は、重奏による『第三の男』（写真②）、



独奏で『「アニー・ローリー」による即興曲』（写真③）、重奏で『風の丘（魔女の宅急便より）』（写真④）



『My Heart will go on（タイタニック愛のテーマ）』、独奏で『ジプシーの嘆き』（写真⑤）、



⑤ 重奏で『シチリアーノ』（写真⑥）、独奏で『G線上のアリア』（写真⑦）、重奏で『哀愁のミュゼット』（写真⑧）、『明るい街角で』（写真⑨）、独奏で『Est Ovest』（指導の森陽介先生の演奏）（写真⑩）と続けました。





⑧

(写真⑪)



⑪



⑦



⑩



⑨

最後はまた全員合奏で『グァンタナメラ』『夢のタンゴ』でした。『グァンタナメラ』ではラテン・パーカッションも使用してキューバ民謡らしい雰囲気醸し出し、途中で歌の歌詞の「グァンタナメラ」の部分を観客も一緒に口ずさめるように促して下さり、自然と身体と口が動きました。音楽を皆で一緒に楽しんでいるという実感が湧いてきて、とても良かったです。

アンコールにのせての曲は 9 月に開催された「関東アコーディオン演奏交流会」合奏の部への出場曲『ラデッキー・マーチ』でした。(写真⑫)

今回の会場の響きがあまりに良くて残響が長いためにテンポの調整に少しご苦労があったと聞きましたが、少しゆったりめに仕上げた演奏でした。事前に会場の環境も確かめて、音の響きも考えての調整を其々の曲に対してなされたのだと思いますが、音楽に対する真摯な取り組みの姿を感じました。

時間をかけてメンバーの皆さんで協力し合いつつ本番までの練習を重ねてきたことが分かる素晴らしいコンサートでした。どの曲にも弾く人たちの想いがこもり、聴く側の私たちを幸せにしてくれました。指揮・指導をなされた森陽介先生、そしてサークルメンバーの皆さん、日曜日の昼下がりの素敵なひとときを、ありがとうございました。

工藤絵里

(写真：編集部)



⑫

パリ、愛の歌～魅惑のフレンチ・シャンソン

2022 年 10 月 8 日(土) 鎌倉芸術館 15:00 開演 (神奈川県鎌倉市)

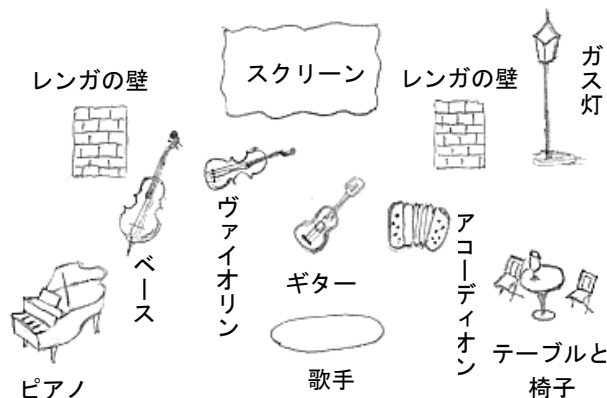
急激に秋の深まりを感じさせた前日の雨も上がり穏やかな土曜日でした。筆者の住む川崎から身近な場所での開催は今日が最後なので、“やっぱり聴きに行こう”とチケットが買えるか前日からチケットセンターに電話をするも「電話が立て込んでいますしばらくしてからお掛け直し下さい」の繰り返しでした。大きなホールなので行けばどうにかなるだろうと考えて足を運んでみました。

到着してみると、すでに開場時刻を回っていたのでチケットを持った方が続々と受付へ向かって行きます。主催が民音でしたので会員の方が多かったのかもしれませんが。

これはダメかなと思いつつ受付近くの係員にたずねると、2 階席か 3 階席であれば、ということで 2 階中央あたりの席を購入できました。

隣の席を空けることはなく、入場人数制限はなかったようでした。とはいうものの、『お客さん同士の会話はお控え下さい』と書かれた用紙を客席に見えるように掲げて係の方が数人巡回していました。また、開演前のアナウンスでも同様にお知らせしていました。

さて、舞台の配置はこんな感じです。(イラスト参照)



出演者

- ◇クレール・エルジェール (歌手)
- ◇ドミニック・クラヴィク (ギター、歌、プロデューサー)
- ◇グレゴリー・ヴー (ピアノ、歌)
- ◇オリヴィエ・モレ (ベース)
- ◇マティルド・フェブレール (ヴァイオリン)
- ◇クリストフ・ランピデキア (アコーディオン)

スクリーンに最初に写された字幕は「・・・皆様にお会いできる日は本当に長かった・・・」でした。

プログラムは、【第 1 部 パリの街歩き】。【第 2 部 愛の歌】。とグループ分けされています。第 1 部最初の曲は、「ラ・ギーニュ」歌手は入

らずミュゼット・バンドのみの演奏で始まりしました。クレール・エルジェール(歌手)は 2 曲目の「パリの空の下」の前奏と同時に登場します。歌い終わったあと、日本語で『日本のみなさんこんにちは、私の名前はクレール・エルジェール』と自己紹介。

挨拶のあとは「パリの橋の下」、「古きパリの岸边で」と曲名にパリの文字が続きます。この 2 曲はギターの音がよく聞こえていた。

次の「クロワ＝フリ村のスラローム」はダニエル・コランのオリジナル曲と字幕に映りバンドのみの演奏で、コントラバス、ヴァイオリンの音がよく通っていた。1 曲ごとに 100 文字程度の曲の解説がスクリーンに映されます。

会場では客席の照明が落とされていたので気がつかなかったけれど、帰宅後改めてプログラムを見ると、プログラムには演奏曲順に 24 曲全て解説が載っています。そして、この解説は前原克彦さん(文学・フランス語)によるものでした。余談になりますが、前原さんは、本年 9 月 11 日開催の第 34 回関東アコーディオン演奏交流会の舞台監督をされた方です。筆者もフランス語教師であることは承知していましたが、改めて前原さんのご活躍を目にしました。

スクリーンに映し出された字幕はこの解説からも使われていたように思います。

舞台に戻りますが、第1部6番目の「私のパリの通り」は、ピアニストと一緒に歌に参加、はずむ三拍子に聴いている客席の身体も一緒にはずみます。「5月のパリが好き」では、ギター奏者だったと思うのですが弾き語りのようにうたっていた。やはり見えづらかったのか2階席の筆者の近くの席の方は時折オペラグラスを覗いていました。

そして「アコーディオン」と続き「ラ・ジャヴァネーズ」でのアコーディオンの響きは低音が入っていたのか変わった音色に聞こえました。

続いて「グレコ、あなたを忘れない」そして、第1部の最後「オー・シャンゼリゼ」では、歌手がピアニストの脇に座ってデュエットする場面もあって会場は手拍子で参加していました。盛大な拍手で第1部終了。

【第2部 愛の歌】は、ピアノ、ヴァイオリン、コントラバスによる映画「ハウルの動く城」の主題歌「人生のメリーゴーランド」の演奏で始まりました。そして「サクランボの実る頃」、「オートバイの男」と続く。この曲（オートバイの男）は初めて聴いたけれど、前のめりでどうにも止まらない演奏だけバイクが疾走している感じが良く出ていて楽しめました。シャンソンにもこのような曲があるんですね。

次は「何でもない歌」これも初めて聴いたけれどかわいい曲です。そしてよく聴かれる「愛の賛歌」は心の中でハミングしていた方もおられたのではないだろうか。「聞かせてよ愛の言葉を」と続き、「枯れ葉」この曲はピアニスト、グレゴリー・ヴーの弾き語りで始まる。「枯れ葉」を男性が歌うと説得力を感じるのは、イブ・モンタンの影響だろうか不思議な曲です。

次の曲「あなたの頭の中でピョンピョン跳ねた鳥」、この曲も初めて聴く曲ですが何と不思議な曲名だろう。他人のしかも頭の中で、です。解説によると歌手のクレールの詩にピアノのグレゴリーが曲を付けたとあります。日本語訳がわからないので詩の言葉はわからないけれど、コントラバスの響きが心地よく、夢の中でささやいている風景のようにも聴こえます。そ

して、「彼と彼女のソネット」、「男と女」と続きます。次の「サン・トワ・マミー」はピアニスト、グレゴリーの歌で演奏。この歌の途中でクレールによってパリ・ミュゼット・バンドのメンバーが紹介されました。（客席からは拍手）メンバー紹介の後はデュエットで終わります。

続いて「あとには何もない」この曲も初めて聴きます。コントラバスはボーイングで演奏、静かな曲です。そして最後に選んだ曲は「水に流して」です。ピアノがコードを“バンバ、バンバ”と鳴らし続ける進行が印象に残る初めて聴く曲で第2部は終わりました。

客席の大きな拍手に送られて演奏者退場。いつまでも鳴り止まない拍手にアンコール。演奏曲は「バラ色の人生」と、もう1曲「見上げてごらん夜の星を」の方は1番はフランス語で2番からは日本語で歌いました。（盛大な拍手）・・・スクリーンには「またお会いしましょうの文字」

全員舞台の最前列で手をつなぎ大きな拍手に応えて幕が下りました。

会場のお客さんは大勢だったので、係員の指示で上の席から順に退場しました。筆者の2階席は3分の2ほど入っていた。3階の様子は見えなかったけれども、退場の際に上からも大勢降りてきたので3階にもかなり入っていたのでしょう。1階席はほぼ埋まっていたように見えました。

アコーディオンを練習すると、シャンソンに出会います。今日のバンドのようにふわっとした演奏ができると良いですね。



コロナ禍の中でもこうやって生で聴くことが出来たことはラッキーだったと思います。

写真はプログラム表紙のトリミング画像です。第2部の服装に似ているので載せて見ました。第1部の服装は、ラフな感じのプリント柄でのステージでした。（記：乙津）

「第11回 めくもりコンサート」音楽センターアコーディオン科三多摩教室

2022年11月27日(日) 14:00 開演 「ルネ小平」レセプションホール 入場無料

全国的に穏やかな天候に恵まれた11月最後の日曜日、音楽センターアコーディオン科三多摩教室主催の「第11回 めくもりコンサート」を聴きに出かけました。素敵なポスターが迎えてくれます。



また、ホール出入り口扉の横には素敵な絵(写真)が飾られていました。作者はメンバーの菊地毅画伯です。

モデルもメンバーの石橋友子さんです。

プログラムは途中15分休憩を挟んで教室生全員(8名)がそれぞれ独奏に挑戦。前半は全員合奏で始まり、後半も全員合奏で終了。そして前半の途中に重奏1組、最後と後半の最初にデュオが1組ずつ組まれ、また後半にはゲスト(ソプラノ歌手、山田千賀子さん)の独唱を入れた構成です。

記事の中で特に記載のない編曲は、講師、川口裕志先生の編曲です。

開幕の準備が出来たようです。女性は上着を桜色、下は黒で揃えて、男性は上着を白、下は黒で統一し舞台の椅子に座ります。

定刻になると、静かに演奏が始まりました。曲は、映画「ニュー・シネマ・パラダイス」より「ニュー・シネマ・パラダイス」。ゆっくりと霧が流れ会場は夢の中の世界へと誘われていくような感覚になりました。

オープニング後、司会から『みなさんと楽しいひとときを過ごすことが出来るよう、出演者、スタッフ一同頑張っていきたい』また、『司会からの演奏曲の紹介は控えるのでプログラムに挟んだ「演奏曲目解説」をご覧ください』とのコメントがあり、早速一人目の独奏へと進みました。

今年5月に教室に入ったのでまだ半年ですと紹介された方は、ボタンアコで映画「アメリ」より「アメリのワルツ」を演奏。三拍子できれいに流れていました。

独奏の二人目は、31年と10ヶ月皆勤賞を続けていると紹介があり、譜面台に真っ赤なバラ1輪飾って「薔薇のタンゴ」を演奏。

次は四重奏で「さくらんぼの実る頃」、途中出てくる分散和音で聞こえるさくらんぼの実をついばんでいるのだろうか、小鳥のさえずり、またカッコウの鳴き声のような編曲は重奏のなせる組み合わせで素敵です。(写真①)



① 再び独奏にもどります。『この曲には歌詞はないけれど、激

しさと穏やかなところが弾き分けられるように頑張って演奏します』と紹介された方は「ジェラシー」を演奏。しっかりした最初の音でイントロから引き込まれます。やさしい伸びやかな音が印象的です。

続いての独奏は、『この曲を演奏しているときは、まるで恋をしているときのようなハッピーになれる』と紹介された方は、リチャード・カーペンターの曲で「トップ・オブ・ザ・ワールド」を演奏。何より演奏中の優しい笑顔が素敵です。まるで歌が聞こえるようと思ったら演奏者自身が口ずさんでいたのです。ボタンアコで楽しそうに演奏する姿は確かに客席をハッピーにしてくれます。

前半の最後は、おなじみとなった“なお and とも”にパーカッションが加わった「証城寺の狸囃子 主題と変奏曲」。カホン、タンバリン、シンバル、笛、トライアングル、鈴、いろいろ入って、また、テンポを上げたり楽しい演奏です。(写真②)



アコーディオン仲間が大勢聴きに来ていて席は満席でした。

～ここで換気かねて15分休憩～



後半はデュオで始まりました。似た柄のシャツを着て登場。二人で付けたユ

ニット名は「アコぶーぶ」、ブーブー文句を言ったりアコをブーブー鳴らすから。と紹介されて演奏した曲は「ホール・ニュー・ワールド」聴いたことのない曲だったので帰宅後調べてみると、ディズニーのアニメーション映画「アラジン」の中で

使われている歌と知りました。(写真③)

この後は5人独奏が続きます。最初は、みんなで歌を歌おうという曲ですと紹介された演奏曲は「シング」。じゃばらとボディーが鮮やかな赤い楽器で演奏します。

次の独奏は演奏者自身の編曲で「オンザ・サニーサイド・オブ・ザ・ストリート」前奏の後はパーカッションが加わりウキウキしてきます。(演奏者は、冒頭で紹介した絵の制作者)

次は、『チャイコフスキーの切なく美しいメロディーに惹かれて練習しているうちにこの曲に人生の秋を感じた』と紹介された曲、『組曲「四季」より「10月」秋の歌』を演奏(中山英雄編曲)。演奏終了後に客席から「ブラボー」の声が上がっていました。

次は、『この時期ロシアの歌は聴きたくないという人もいると思いますが、ロシアの持っている音楽の豊かさ奥深さをこの「白樺」にのせて平和を願いながら、心を込めて演奏します』と紹介。また、司会からロシアへ行かれた際に購入したと紹介のあった衣装で登場、ドレイズィン作曲/中山英雄編曲「白樺」、三拍子に乗って軽やかに流れます。分散和音や重音の厚みのある編曲です。(写真④)客席から“ブラボー”の声。終了後“ブラボー”と叫んだのが編曲者の中山英雄先生だったことを知り、『私の一生の宝になった』と後日演奏者はおっしゃっておられました。

次はゲスト(山田千賀子さん)の独唱です。季節に合わせた枯葉色のドレスで登場。伴奏は川口裕志先生。一曲目はアイルランド民謡「ダニー・ボーイ」。二曲目は、ウクライナ民謡「キエフの鳥

の歌」伴奏のバックでトライアングル、タンバリン、シンバル、ウッドブロックだろうか、がやさしく支えます。



(左の写真)

ここで教室生からゲストと講師に花束が贈呈されました。そして、コンサートの

最後は全員合奏です。

女性は上を赤色で揃え、男性は上下黒色で揃えて登場。楽器も赤あり、黒あり、白ありとカラフルです。演奏曲は1度聞いたら心に残る曲と紹介された「オペラ座の怪人」(写真⑤)です。

演奏の前に教室のキャップからお客さんへ、コロナ禍で不安の中コンサートに足を運んで下さったことへのお礼。そして、『今年はさらにロシアのウクライナ侵攻が加わり日々不安の中、自分たちで選んだ曲の中にロシアの曲が入っています。このような素敵な曲を生み出した国々が争い合っていることは本当に残念で悲しいことです。ロシア語もウクライナ語もわからないけれど、音符を奏でることその国の人々とつながることができる。私たちはアコーディオンを通して本当に素晴らしい言語を学んでいるのだと思った。』また、自分の演奏した「トップ・オブ・ザ・ワールド」の詩の一節を紹介したあいさつに拍手があり、最後の全員合奏に入りました。

合奏には厚みがあるので聴き応えがあります。演奏後アンコールの声がかかり、用意した曲は「歓喜の歌」ゲストのソプラノ歌手そしてパーカッションも加わり喜びを歌います。鉄琴の音もこの曲にあいますね。盛大な拍手で終了しました。

(記:乙津/演奏写真:主催提供)



「オペラ座の怪人」演奏の様子

聴いてきました「音楽教室 風のうた 10 周年記念 アコーディオンコンサート」

2022 年 11 月 19 日（土）14 時開演 新潟市音楽文化会館

筆者の所属する音楽センター南部教室で 10 月から取り組み始めた合奏曲「ロンドンデリーのうた」の編曲者が「音楽教室 風のうた」を主宰する荒木奈緒子さんだったことと、新潟県でアコーディオンを教えている教室があることを関東アコのニュースで紹介できたら良いなどの思いから、ちょっと足を伸ばして聴きに行きました。

新潟県を訪れるのは初めてです。上越新幹線「新潟駅」で下車、観光循環バスで白山公園前まで行き、停留所から徒歩 7 分くらいで会場に到着します。新潟駅前には現在大規模な工事中で、きれいな完成予想図の大きなポスターが張られていたけれども、閑散としていたのは意外でした。

バス停からちょっと反対方向に歩いてしまい、地元の方に場所をたずねたり、隣り合う新潟市民芸術文化会館（りゅーとぴあ）と一体となったループ状の通路にまごつきながらもどうにか開場時間にはたどり着くことが出来ました。

初めて聴きに行く団体なので、以下にプログラムの「ごあいさつ」から一部を転記させていただきます。（受付に置かれたウェルカムボード↓）



「アコーディオンを広めたい」という漠然とした思いでスタートした教室に、ぼつりぼつりと生徒さんが来てくれるようになり、少しずつ弾き手が増えていきました。ソロがデュオになり、アンサンブルになり、合奏ができるまでになりました。そして、この願いは私だけのものではなく、皆と分かち合う夢になりました。

ここ新潟に、アコーディオンを通じて生まれた音楽仲間のつながりが、かけがえのないものとして育まれていくよう、また、風のうたがいつでもお互いを信頼し、尊重し、刺激を受けながら楽器と向き合える場であるよう、これからも力を尽くして参りたいと存じます。（音楽教室 風のうた主宰 荒木奈緒子）

荒木奈緒子さんのプロフィール（プログラムより一部を転記）

2001 年、アコーディオンに出会う。松永勇次氏、柴崎和圭氏に師事。御喜美江氏の公開レッスンを

受講。2002 年 JAA 国際アコーディオンコンクール上級の部にて奨励賞を、2005 年同コンクール上級の部にて努力賞を受賞。現在は新潟県燕市、三条市の ITOYA CAFE、新潟青山カルチャープラザにて、それぞれのペースで楽器に親しめることを大切に指導に当たっているが、音を重ねていく楽しさ、一緒に音楽を作る喜びを分かち合えたらと、アンサンブルや合奏の指導にも積極的に取り込んでいる。（筆者注：他にも多彩な活動をされております。詳細は、「音楽教室 風のうた」ホームページ <https://www.kazenouta-accordion.com/> よりご覧になれます）

プログラムは第 1 部、第 2 部とあり、第 1 部はオープニングと独奏で、1 部の後半はゲスト演奏です。ゲストは大田智美氏です。そして休憩の後、第 2 部はアンサンブルと合奏の構成でした。

さて、オープニングは合奏で「カントリーロード」（8 名）信濃川に浮かべたいかだに乗って流れるような柔らかな演奏が終わったところで、ステージを独奏用にセットする間を使って教室の紹介がありました。以下、教室紹介。

『小学生から大人まで、燕教室、ITOYA CAFE 教室、新潟青山カルチャープラザ教室でアコーディオンに親しんでいること』

『教室の始まりは、日本アコーディオン協会にかかってきた「新潟でアコーディオンを習えるところはないでしょうか？」という 1 本の電話で、それが当時新潟に移り住んだばかりの荒木さんに取りつがれ、これをきっかけに、新潟にアコーディオンを広められないかと始めたこと』そして

昨年秋に 10 周年を迎えたこと、また、記念すべき
昨年はオンラインコンサートや、日本アコーディ
オン協会主催の「インターネットわくわく広場」
に出場するなど精力的に活動してきたことが司
会より紹介されました。

さて、独奏の最初は、シューマン作曲「刈入れ
る人の歌」、ピアノ譜をそのまま演奏します。と紹
介された演奏者は小学生に見えたけれども、オル
ガンのようなスイッチに柔らかい指使いでスタ
ッカートがきれいでした。

続いての独奏「ジュピター」を演奏された方も
小学生でしょうか、始めて 1 年とちょっととの紹
介だけれど堂々とした演奏でした。次の演奏者は
始めて 7 年になるそうです。V. グリーノ J. コロ
ンボ作曲「San Sebastiano」軽快なテンポで「チ
ャッチャッチャッチャッ」と刻むベースに乗って、
細かい動きや音の飛ぶところがあったりで弾く
のが難しそう！と思いながら聴いていました。そ
して、1 部独奏の最後は「クロードのタンゴ」し
っかりした音で素敵な演奏でした。

ここで、ゲスト演奏の準備をする間、楽器の紹
介をしました。机に鍵盤式の大きなアコーディオン
(120 ベース)、かわいい小型の鍵盤式アコーディ
オン、中型のボタン式アコーディオンを並べて
の紹介です。

音の出る仕組みとじゃばらの役割、鍵盤を押し
てもじゃばらを動かさないと音は出ないことや、
並んでいるスイッチを切り替えることで楽器に
ある鍵盤より 1 オクターブ高い音域また低い音域
が出せること、そして音色も変わることなどの説
明をお客さんは真剣に聞いていました。

ゲスト演奏

司会から、ゲスト大田智美氏は幼少期にアコー
ディオンを始め。高校卒業後ドイツで学び、デト
モルト音楽大学アコーディオン教育学科、フォル
クヴァンク音楽大学芸術科コースを経て 2009 年
に帰国後はソロや新曲の初演、オーケストラの共
演など幅広い分野で活躍されています。などと紹
介があり、拍手で迎えて演奏へと移りました。

曲は、J.-Ph. ラモー作曲「ロンド風のミュゼッ
ト」、M. ルグラン作曲「シェルブールの雨傘」、佐
藤芳明作曲「レミファソラの為の 3 つの小品より

Ⅱ. 深淵」と 3 曲はフリーベースで演奏。霧が流れ
てゆく木立の中にこびとたちが顔を出し遊び始
めるバレエの一場面のような静かな演奏が続き
ました。

3 曲弾き終えたところで、左手にあるフリーベ
ースのボタンを使い実際に音を出し単音で出る
音階を弾いてみせると私の前に座ったお客さん
は身体を前に乗り出して不思議そうに見ていま
した。その後は、コード演奏に切り替えて G. マト
ス・ロドリゲス作曲、中山英雄編曲「ラ・クンパ
ルシータ」の華やかな演奏、最後もタンゴの曲 A.
ピアソラ作曲「Sentido Unico」。

さらに、第 1 部の最後に、風のうた主宰荒木奈
緒子さんが埼玉におられたころからのお友達だ
ったので 10 周年記念に是非一緒に演奏したいと
プログラムに入れた E. グreek 作曲、内田祥子編
曲「ホルベルク組曲より 前奏曲」をお二人で演奏
されました。草原を乗馬して 2 頭で走っている
ような明るく爽やかな演奏で第 1 部は終了。

～15 分間の休憩～ ロビーではゲストの CD を
販売していました。

第 2 部は前半をアンサンブル、後半を合奏でま
とめています。アンサンブルの最初の演奏曲は
「ポル・ウナ・カベサ (首の差で)」四重奏です。

次の「天国と地獄」も四重奏だけれど、運動会
をイメージして小学生と思われる二人は赤白帽
子をかぶり、大人二人は赤白のはちまきをして軽
快に演奏、会場もちょっと明るくなりました。



次からのアンサンブル 3 曲は今年に入って取り
組んだ曲と紹介があつて、1 つは「ハウルの動く
城」より人生のメリーゴーランド (四重奏)、二つ
目はミュージカル「マイ・フェア・レディ」より
君住む街角を五重奏で、三つ目、アンサンブルの
最後は「エスクアロ (鮫)」(四重奏) で、一人参

加できなくなったメンバーに変わりゲストの大田智美氏が加わってプログラム通り四重奏で演奏。

この後は荒木奈緒子さんの指揮による合奏です。『2019 年から発表会のたびに 1 曲ずつ取り組みそれぞれの力量に合わせて編曲して全員で演奏する合奏を育ててきた』と合奏への思いが紹介され、最初はアイルランドに由来のある三つの曲をメドレーで楽しめます。望郷のアイルランド〜ジョン・ライアンズ・ポルカ〜イエスタディ〜ロンドンデリーのうた〜を 7 人で演奏します。軽快なテンポのポルカで始まり、おなじみのイエスタディ、最後はしっとりとロンドンデリーのうた。

最後の「ロンドンデリーのうた」は筆者が所属するアコーディオン教室で 10 月からとり組んでいる合奏曲です。しかも譜面の編曲が荒木奈緒子さんでしたので、耳をすまして聴かせていただきました。

二つ目は G. フォーレ作曲「シシリエンヌ」を 8 人で演奏。

ここで、『楽器の持ち方もわからなかった生徒がいつしか夢中になり練習を続けて一人ひとり力を付けてきました。そんな仲間たちと一緒に音楽を作る喜びを知りました。』と司会の言葉があり、最後の演奏は始めて数ヶ月の二人も加わり 12 名

で演奏。曲は J. シュトラウス 1 世作曲「ラデツキー行進曲」。曲の途中にゲストの大田智美氏のソロが入る編曲でした。演奏が始まると会場のどこからともなく手拍子が始まりました。エンディングにこのような曲が演奏できると素敵ですね。(写真)

大きな拍手のあとゲストの大田智美氏に花束の贈呈があり、小学生と思われる二人のお嬢さんから花束を受けたあとゲストが握手をしようとしたけれど子どもたちは顔を横に振り、肘タッチにする一幕も。小学生にもしっかり感染症対策が浸透しているんですね。

続く拍手に応じて、アンコールでジャズフィーリングの「オン・ザ・サニーサイド・オブ・ザ・ストリート」を演奏して幕となりました。未だコロナ禍のため、演奏者による見送りはなく流れ退場となりました。

荒木奈緒子さんが埼玉におられたころ所属していたサークル「ウインドバスカーズ埼玉アコーディオングループ」の方も聴きにきていて、帰りはバス停まで一緒に歩いていただき大変助かりました。新潟まで毎回足を運ぶのは難しいけれど、機会があればまた“風のうた”の成長した姿をお知らせできればと思っています。

(記：乙津/演奏写真：主宰提供)



前列左端は
主宰：荒木奈緒子さん

「ラデツキー行進曲」演奏の様子

前列右端は
ゲスト：大田智美氏